

女尊男卑の女の園2



玉子王子 著

1章 チ○コがついてる奴はなにをするかわからないからね！

プレハブの建物の中に、同じ制服の少女が十人ほど。

明るすぎる年代だろうに、陰鬱な顔で座っていた。

幼年部から大学まで一貫式の学校、如尊学園の○等部、如尊○子高。

その校庭の一角には、プレハブが二十個も建っている。

それでも運動のための空間などいくらでもあるので、相当広い学校という事になる。

今は、生徒数が三百人ぐらい。

これからは、さらに減っていくと見られていた。

だから、今年から男子を受け入れている。

今、四月から受け入れ、七月。

三ヶ月目、ということだ。

当初こそ、学校の女子全体がなんとなく共学化に反対していた。

それこそ、全男子を些細な理由でフルチンにして、一物の大きさのランキングを作るようなことまでした。

今でも、毛利琴恵はそのときのことを鮮明に覚えているし、たかが十五人しかいない男子なので、全員の順位も覚えている。

特に、**如尊ランキング一位**のクラスメイト愛間空敏など忘れようがない。

一位、というと誤解されるかもしれない。

彼の一物は上から数えて十五人目だ。

だが、一番ネタになる最下位が「十五位」では面白くないので、下から番号をつける事にしたのだ。

つまりは、如尊ランキングとは巨根ランキングではなく、短小ランキングなのだ。

——面白かったわよねえ、あの頃は。如尊ランキングって、なんかテラ○オーマーズみたいだし。

ため息が出る。

今は、その頃の雰囲気はまったくない。

「琴恵、クラスはどう？」

「全然ダメですよ先輩。皆男子と結構仲がよくて」

「あー、ったく、仕方ないね。私のクラスの連中もそうだよ。男子連中を後輩と見なすようになってさ」

男子は一年のみ。

だから上級生たちは直接関わっていない。

だからそれほど親しくなる必然はないが、何分恋愛に関心のある年代で、男子はその下級生たちしかいない状態だ。

わざわざ関わりに行くものも多い。

この場にいる者たちこそ、今や例外に近い。

この十人の集まりは、「梨の会」の集会である。



梨の会は正式名称ではない。

正式には「キン無しの会」だ。

もちろん、金銭がないという意味ではない。

ここで言う「キン」は男にしかない特定の臓器のことである。

男子への敵意を丸出しにした名前で、流石に表立ってその名前を言いくるるのは共学化反対の過激派たちでも憚るので、「梨の会」とした。

「男子が後輩！？ やめてくださいよ」

「私じゃないって。私は昨日もあの、ほら、ランキングトップのあいつ」

「空敏」

「そう、そいつのキ〇タマ蹴り上げてやったよ。階段上ってるところ、下で見てたから。パンツ見ようとしたんだ、キ〇タマの犠牲は当然」

普通の階段なので、とてもそれでパンツなど見えない。

言いがかりだが、二ヶ月ぐらい前まではよくあった。

おかげで男子たちは常に俯いていなければならないぐらいだった。

しかし、それはそれで周りがよく見えない。それで女子とぶつかると「痴漢だ」といわれて金的蹴りなのでやってられない。

が、最近はそういう雰囲気はなくなっていた。

まあ、普通の女子にずっと続けられるノリではなかったということだろう。

「男子なんざ毎日挨拶代わりにキ〇タマ蹴りでいいんだよ。玉が万が一潰れても、ナノテクで治るんだし。最近いい薬出回ってきてるだろ？」

「なんか十秒で治るとか」

「擦り傷よりキ〇タマ潰れた場合の方が早く治らね？」

「キ〇タマ皮一枚より軽いよ！」

「っていうか、あの**短小横綱**、凄い皮だよね！」

「チンチ〇だけ守っても意味ないって！ キ〇タマ守らないと！」

手を叩いて笑いあう少女たち。

やっと元気が戻ってきた。

ついでに言えば、肉玉が潰れた人間と足の皮をすりむいた人間が同時にナノテク薬を飲んだ場合、大体同じぐらいに治る。

肉玉や皮膚をナノメカが治す速度は、ほぼ患部に届くまでの時間であるためだ。脳や眼球ならば届いてからもう少しかかるが、それでも数分で治る。

その意味でもう、確かに少女らが言うとおりの治療においては肉玉も皮膚一枚も同じぐらいの重さといえなくもない。

もっとも、損傷したときの苦痛では天地の差だが。

「あーあ、こんな風に話しても何にもならないよ。皆仲良くするなって言ってんだけど」

「別に私たち、学校支配してないしね」

「っていうか、〇子高に支配とかないし」

共学ならギャルが上、オタクが下、と序列がつく。

しかし〇子高は不思議等そういうのはなく共存している場合が多い。

その理由は、どうも男子の目がなく、恋愛がらみの上下関係が出来ないためのようだ。

男子がいると、どうしてもオタクよりもギャルの方が上に見られ、本人たちもその気になってきてしまう。

その辺の理論は、梨の会では常識だった。

だから、絶対共学化は反対なのだ。

——男子はクソ。腐れキ〇タマゴチャッとやって放り出すべきなのよ。でないと如尊も余所の学校みたいにスクールカーストに支配されていじめだのなんだのが起きて無茶苦茶になるわ。

後輩のために、なんとしても共学化は止めねばならないと思う琴恵。

「このままじゃ、なし崩しに男子を受け入れさせられるね」

「いやああああっ！ 先輩嫌な言い方しないで！ 気持ちわるいっ！」

「え？ あ、いや、別に変な意味じゃないよ？」

性的な意味ではないことはわかっているけど、なんとなくそう感じてしまった女子が悲鳴を上げる。

その女子が、横の背の高い落ち着いた感じの女子にしがみつく。

「私たち、男を相手にするぐらいなら死ぬ！ ね、お姉さま！」

「死ぬ前に私たちが狙う男のキ○タマ潰してやるわ。もちろん二個ともよ、二個とも」

「さっすがお姉さま！ 話がわかるっ！」

——レズなの？

別にレズを否定するものではないが、肯定するものでもない琴恵。

「と、とにかく、皆いい案ない？」

梨の会の発起人である三年生。

中根、という勢いに乗れば飛び上がっていくが、躓くと落ちる所まで転げ落ちる気分屋タイプ。

正直、あまり頼れる感じではない。

調子がいいときにはリスクを考えずに先頭を突っ走ってくれるのだが。

——私が考えないとダメね……

クラスメイトの仲良し、由紀や咲花も最近では男子と仲がいい。

いや、由紀は何かにつけて金蹴りや握り潰しで男子を悶絶させているが、どうもそれ自体が楽しくて仕方ない感じだ。

ようは、嗜虐性癖というわけだ。

——変態よね。しかも、あの短小ランキングダントツ一位の空敏……どうも責められてチ○ポ立ってるみたいだし。このままいったら明日にでも変態カップル誕生かも。最悪だわ。

咲花のほうは、元来気が弱く、優しいタイプ。いつまでも男子を圧迫し、嫌がらせを続けられる性格ではなかった。

仲間が減ることはあっても、増えることがない三ヶ月だった。

ここらで何とか反転攻勢にでなければおしまいだ。

——男子なんてクソなのに……この前も……

新聞で性犯罪者が逮捕された報道を読んだ。

五十人以上をレイプしていたという男。

それが偶然元被害者の経営する病院にやってきて、気づかれ、DNA鑑定やスマホに残していた画像で犯人と断定された。

それで逮捕、とは行かなかった。

思わず、頬がにやける。

詳細は省くが、その女医と、それを手伝った婦警と、彼女らが集めたその犯人から被害にあった女性たちは犯人の男にしっかりと罰を与えたのだ。

特に、特に男性器に入念に、念入りに。

その報道は、梨の会でも喜びと共に受け入れられた。

部室に、その新聞記事が張られている。

去勢女医 性犯罪者が手術を受けようとした女医は元被害者だった！

地獄の去勢リンチが始まる！ 玉潰しの果てに男を待つのはチン切り去勢綱引き！

とてもではないがその辺に張っておける見出しと記事ではないと思えるが、梨の会の少女たちにとってそれは祝、日本代表金メダル！ というのと同じようなものだった。

——本当に何度見てもいい記事ねえ。見てない人はぜひ見て欲しいわ。体験版入れておくから。

わけのわからないことを考えつつ、ふと何かひらめく。

「ん……性犯罪者……」

「ああ、琴恵またこの記事を。これの一番いい所は、女医さんがしっかり冤罪を生まないようにDNA鑑定とか、あらゆる方向から犯人特定に力を尽くしたことよね」

「そうそう、性犯罪の冤罪なんて掛けられたら人生おしまいなんだから。絶対それは避けるべきよ。過失でもある程度罰を受けるべき。そしてわざと冤罪かける奴は死刑ね！」

「そうそう！ それを絶対の前提とした上でだけど……性犯罪者は週一で**去勢リンチ**にすべきよね。潰れたらすぐナノテクで治療して**二十四時間連続玉潰し**、何個ぐらい潰せるかしらね」

「いいわね！ それでこそレイプやって二年？ とかいうクッソ短い刑期も納得いくってものよ！」

「わざと性犯罪の冤罪かける奴は死刑！ そして性犯罪者は週一去勢リンチ！ これが梨の会のマニフェスト！」

勢いの乗るのには長ける会長の叫びに、琴恵以外の会員は目を輝かせて手を叩く。

週一で去勢リンチを二年も受けたら**廃人**になりそうだが、まあ勢いのまま喋り捲っているだけのことだ。

琴恵は付き合いで手を叩きつつ、考える。

何か、いいことが思いつきそうなのだ。

——性犯罪……うーん、何か思いつきそうなの。男子なんかいつ性犯罪やるかわからないよね、って皆が思ってくれればいいんだけど、そんなこと言っても誰も聞かれないし。無理にゴリ押ししたら共学化反対派の方が悪者になりそうだし……その辺上手く誤魔化す手がないか……誤魔化す、偽装……あ。

立ち上がる。

「いい手がありますよ！」

会長に向けて、目を輝かせる琴恵。

授業が終わり、立ち上がる空敏。

最近、やっと少しはましな生活が出来始めていた。

入学当初など、ことあるごとに金蹴りを食らったり、フルチンにされたりと悲惨極まりなかった。

周りのほぼ全てが女子ばかりで、助け舟を出せる男子などはいない。

教師まで女性がほとんどという、**地獄のハーレム**だったのだ。

それがやっと、最近では**二級市民**ぐらいにはなれてきていた。

まあ、クラスメイトの藤木由紀だけは例外で、毎日のように金責めを仕掛けてくる。

しかも、空敏が興奮して一物を立てているだろうとセクハラ発言のおまけまでつく。

——まったくとんでもない女だ。まあ、結構立っちゃうけど……それは仕方ないよな。藤木は結構かわいいし、ああいう若い女の子に股間弄られたら、立つのも仕方ない。

肉玉を蹴られて立つのはどう考えても一般的な性癖ではないが、気づかない振りの空敏。

別に、蹴ってくれというほどのMでもない。

相手がかわいいとちょっと反応してしまう、程度のことだ。

「皆、ちょっと話があるんだ」

琴恵。

最悪の類の女子。

男子を何とか追い出し、共学化を止めようとしている。

梨の会、という変な名前のグループを結成しているという。

クラスの男子仲間である奥中によると、どうもそのグループの本当の名は「キン無しの会」らしい。

正気ではない。

藤木をのぞけば、今やクラスで大した理由もなく金蹴りを食らわしてくるのは琴恵だけである。それを考えると、あまり冗談とは思えない組織名だ。

「実はね、ちょっと勉強会を開きたいの」

関係ない話のようだ。

キン無しの会の会員が男子を勉強会に誘うわけがない。

「特に男子、最近皆仲良くしてきてるから、さらにこの機会に仲良くしたいんだけど、どうかな？」

いわれて、少し前なら周りの女子の顔色を伺って誰も何も言えなかつただろう。

今はそこまで圧迫されていない。

「仲良くするのはいいけど、勉強って苦手」

「奥中、勉強といっても、学校の勉強じゃないよ。新聞の記事を読んで、皆で考えるってだけのお話会。どう？ 空敏」

奥中が苗字でなぜ空敏は名前なのだろうか。

屈辱の**短小ランキングの堂々一位**であることと何関係があるのかと思うとハラワタが煮える。

「そのぐらいなら別に……なあ皆」

女子の顔色を伺わず、自分以外に四人しかいないとはいえ男子に聞く。

皆、特に反対はない。

「よかった、それじゃ始めようか！ そんなに時間はとらせないよ！」

カバンからプリントというか、印刷した紙を取り出して一番前の席に配っていく。

「後ろに回して」

「え？ これ？」

「うっそ、これ話し合うの？」

先頭の女子たちがざわめく。

——なんだ？

妙な内容か。

共学化を潰したどっか別の学校の話だろうか。

そんな話があったか。

「え、こんな事件あったんだ」

「そうだよ。キ〇タマ潰し」

「え？」

思わず、その女子のほうを向く。

前後で、プリントを見合って小声で話している。

それでも、妙な単語は耳に入ってしまう。

ちなみに、男子の席は一番後ろだ。

席の位置は割りと自由なので、そういう風に乗った。

まあ、押し込まれたともいえるだろうが。

最後にプリントが回ってくる。

「うっ」

去勢女医。

そんな見出し。

M男子向けの小説やAVによくありそうなタイトル。

いや、そんなものが一杯あるほど**優しい世界**ではないか。

だがまあ、ありがちであることは確かだろう。

エロ業界のスターである「女医」と、他の要素を混ぜるのは多分よくある着想。

去勢と混ぜるのは一般的ではないかもしれないが、特に不思議な組合せではない。

だが、今日の前にしているのは新聞だ。

一月ほど前に報道された事件。

空敏もリアルタイムで見た。

このうさぎ県で、本当に起きた事件なのだ。

大勢の女性を犯した性犯罪者に、被害者の女性たちが報復するという話。

——そ、それをここで話し合うのか？

男子と女子の間で。

しかも、男子が圧倒的に少ないし、立場も弱いこの如尊○子高のこのクラスで。

唾を飲む。

空敏は、もちろん何もしていない。

性犯罪など、今までしたいとも思ったことはない。

まあ、盗撮ぐらいならある。

だがレイプなど論外だ。

他の四人も同じはずだ。

それは女子たちもわかっているだろう。

だが、それでも……

——なんか、居心地悪い気がする。

机の下で、股間に手を持っていく。

男の部分握る。

それがついているだけで、性犯罪の話となると、何か居心地が悪く感じる。

それは、女子の立場に立てば、男に何か特別な感情を抱いてしまうということではないか。

それを感じるから、居心地が悪い。

が、別に、何もないはずだ。

ただ、勉強するだけの話。

「そうだ、別に何も無いはず……」

呟きつつ、ふと言いだしっぺの琴恵を見る。

彼女がわざわざ性犯罪について話そうなどと言い出して、果たして安心していいのか。

だが、立場の弱い男子としては、何もしようがない。

体験版終わり

この後、三ヶ月前の地獄の女性上位の時代が帰ってきます

むしろ、前より酷くなります

女子たちによる寄ってたかっぺの金責めや全裸辱め、

それに反発した空敏が盗撮を行ってバレ、過酷な制裁を食らうという展開

続きは製品版でお楽しみください